「ポストコロニアル研究入門」読書会

フランツ・ファノン著（海老坂武、加藤晴久訳）『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房、1998 年

2013 年 9 月 6 日

報告：荒木和華子

フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』『地に呪われたる者』

・精神科医、フランスの植民地アルジェリアの首都アルジェ郊外の病院に赴任

・カリブ海マルチニック出身

・自由フランス軍の兵士として戦う。対ナチス

・エメ・セゼール、文化運動ネグリチュードの影響をうける。

・1954 年アルジェリア民族解放戦線（FLN）の蜂起、アルジェリア独立戦争

・FLN の中央委員会に所属し、その他機関紙を編集し、また FLN の大使として、パンアフリカニズム運動の可能性を説く。

・白血病にて、1962 年のアルジェリア独立の 1 年前にアメリカでなくなる。36 歳。

フランシス・ジャンソンによる「序」（1952 年）

・ファノンの読み方として読者に求められていること

「黒人によって生きられた体験とは、限界体験である。これを捉え返してその意味を引き出すためには、まず第一に彼は、なんらかの仕方で、その崩壊の進行過程を再現しなければならない。虚無の通過を、真の「地獄」への降下を。というわけでファノンが、言葉のあの爆薬を、言葉がまとまった文章の中におとなしく寄せ集められて無力化されるということがもうなくなるや否や言葉の中に姿を現わしてくるあのダイナマイトを、ある一つの観念の核心に、ある一つの議論のまっただ中に投げ入れることがある。文脈を爆発させるこの瞬間、、ファノンは、一挙に、われわれの知性に対する確信を解体させ、また、われわれの内部にその爆発そのものを魔術的に再現させるのである。あまりにもむき出しの形で不条理に頭をぶつけ、人間の条件の限界にはまり込んでしまったために、彼が受け身に蒙ってしまったあの爆発そのものを。このようにして彼は、われわれに反省の階段を立ち去らせ、われわれが当の問題を考察したり、黒人の症状に「かがみ込む」ことができると思っていたあのまぼろしの高台から、われわれを飛び降ろさせることに、しばしば成功しているのである。そのときわれわれは、一人の人間の体験に、それが対象化され、肉体から分離され、不毛にされる以前に、実際に生きられ苦しまれているまさにその水準で、近づくことを強いられるのである。」pp.13-14

・ジャンソンの立場の提示、ファノンもこの立場をとるかどうか？

「ところで、人間の夢想が世界を変革するのに十分でないということが明らかであるとしても、この夢想が非人間的であるより、むしろ人間的な傾向を帯びているほうが、おそらく、やはり好ましいとはいえないだろうか。換言すれば、たとえば黒い意識のすべてが、自分たちと白い意識との間に認知の関係を打ち立てることを思い描き、願うことの方が、おそらく、好ましいとはいえないだろうか。このような願いはそれ自身では、抑圧と搾取との客観的な構造を破壊することはできないが、少なくともこれら

の意識が遅かれ早かれ、有効な仕方で、この破壊に尽すのにより有利な立場を築くことにはなるのだから。」p.16

・「黒人文化」に対する否定について
「ところで、共同の運命の自覚―皮膚の色によってこれほど用意に指定しうる人間集団、植民地化の枠内で、黒人という理由で、「劣等」人種として、白人によって搾取されている人間集団、という運命の自覚―によるのでないとするなら、この闘いが、どうして集団的になるであろうか？換言すれば、経済的な疎外の自覚が、ここでは、現段階においては多少とも、人種的な疎外の自覚と一致しているのである。」p.18

・サルトルの定義するネグリチュードは、スピヴァクのいうところの戦略的本質主義と近いのでは？そうだとすると、ここでのサルトルに対するファノンの「恨み」は、スピヴァクに対する被植民者―語っても声を聴いてもらえない者たちの「恨み」でもあるのか、どうか？
「ファノンの体験のうちには、このネグリチュードの「文化」が、彼に残された唯一の可能な解決と思われた一時期――この本の中で説明されているような一時期――があった。彼は、彼もまた、「黒い大きな穴ぼこ」のめまいを身に蒙ったのだ。そして彼は、サルトルが『黒いオルフェ』の中で、ネグリチュードを「移行」として、「手段」として、「否定の契機」として、「弁証法的進行の弱拍」として、「神話」として、「一時的なものであると承知している絶対」として描き出したことに幾分恨みを抱いた。それはまさに、黒人から、ネグリチュードに助けを求める一切の可能性を奪うことではなかったか？」p.19

・革命とは、解放とは

はじめに
・執筆の動機
「これを読む読者のうち何人かだけに、この作品を編むにあたって作者のぶつかった障害が推測されよう。」
「黒人は白人になりたいと望む。白人は人間としての条件を実現することに熱中する。」p.32
「白人は黒人よりも優れているとみずから思っていること、これは一つの事実だ。
黒人は、彼らの思考の豊かさや、白人に匹敵する彼らの精神の力を、是非とも白人に証明したいと思っていること、これもまた一つの事実だ。
どうやってこの悪循環を脱するか？」p.33
―黒人問題に関する精神分析学の分野で
「私はこの病的な世界の完全な溶解に努めたい。」p.33
「私は、白人種と黒人種とが顔を突き合わすところから、心理―実存的コンプレックスが大量に産み出されていると考える。これを分析することによって、コンプレックスの破壊を目指したいのだ。」p.35

・二重性
白―黒

1. 19 世紀末の体質論的傾向（系統発生学）
2. 心理・精神分析（固体発生学）、フロイト
3. 社会・経済状況（社会発生学）、唯物的

「黒人は二つの次元で戦闘を行わなければならない。」p.34　　2.＋3.

「この本は臨床研究である。ここに自分の姿を認めるものは、すでに一歩前進しているのだと思う。」p.36
「心から私は、黒人であれ白人であれ私の兄弟に説得をしたいと思う、数世紀にわたる無理解がこしらえあげたぼろぼろの仕着せを断乎として脱ぎ棄てるように、と。」p. 36　脱構築へのよびかけ
「この本の建築は時間の中に位置している。人間にかんする問題はすべて、時間から出発して考察されることを必要とする。現在は常に未来を構築するのに役立つことが理想だからだ。」p. 36　ファノンの置かれた植民地的状況と知的位置

本書の構成について pp.36-37
1～3 章　「現代の二グロ問題」　白人世界における黒人の態度
4 章　　マノニの著作批判、「危険」である
5 章　　「黒人の生体験」－重要、「黒人としての自己同一性の意味を必死に発見しようとしているニグロの絶望的な努力」
6，7 章　「二グロとして実存することの精神病理的、ならびに哲学的解明」

1. 「黒人と言語」

・言語現象の重視「話すとは、断乎として他人に対し存在することであるのだから。」p.39
「話すとは、ある種の文章の組み合わせを使うことができる、これこれの言語形態を所有している、ということである。だがなによりも、一つの文化を引き受けること、一つの文明の重みを耐えることなのである。」pp.39-40
「アンティル諸島の黒人は、フランス語を自分の国語とすればするだけ、より一層白人に近くなる、言いかえれば、より一層本当の人間に近づいていく、ということ。」
「言語を所有する人間は、当然の帰結として、この言語によって表現され、内包された世界を所有する。」
「言語を所有するとき、そこには、異様な力が伴うのだ。」p.40

・対象をアンティル人のみでなく、「植民地化された人間全体」に
植民地において原住民は劣等コンプレックスを植え付けられ、本国の文化的諸価値を自らのものにしようとする―白人に近くなる。原住民の将校は通訳、司令官の命令を伝え、周囲から尊敬を得る。
・クレオル語、方言の軽蔑―学校で学ぶ
１．フランスのフランス語、フランス人のフランス語
２．クレオル語
３．ニグロのフランス語（片言のフランス語）
←話し方によって人が判断される
正確に話すという意味：フランス「本のように話す」、マルチニック「白人のように話す」p.43

・黒人の発音「R」を飲み込んでしまう。意識過剰になり、R を逆に協調してしまう

植民地の黒人の本国に対する実態を伴う信仰
・「フランスにやってくる黒人は人が変わる、というのも、彼にとって本国とは、〈聖なる場所〉を意味しているからだ。」p.45
人格の変容と新しい存在様式
「同国人に対して批判的な態度をとる」p.46
・アンティル人がアフリカの黒人（より野蛮）に比べて、より「開化」されており、「白人」に近いという認識 p.48
・セネガルの歩兵連隊におけるアンティル人
「戦闘の真最中に、相手の機関銃隊を破滅させるという問題が定義された。三回にわたって、セネガル人が差し向けられ、彼らは三回ともしりぞけられた。そのとき、彼らの一人がなぜトゥバブ[ヨーロッパ人]は出ていかないのか、と聞いた。このとき、われわれアンティル人は、もう一体自分がなにものであるのか、トゥバブなのか、原住民なのかがわからなくなってしまうのである。」p. 49
「植民地者はセネガルの歩兵を軽蔑する。そしてアンティル人は、争うべからざる指揮者として、黒んぼたち全体の上に君臨するのである。」p.49

方言について
「ブルターニュの人間は、フランス人より劣っているとは思っていないからである。ブルターニュの人間は白人によって文明化されたのではないのだ。」p.51

聖書に基づいた人種差別の表現、有色人種の罪について p.53
「そうだ、おわかりのとおり、人間性や、尊厳の感覚や、愛や、慈悲に訴えることによって、黒人が白人と同等であることを証明し、認めさせるのは、たやすいことであろう。だが、私たちの目的はまったく別にある。私たちが欲するのは、黒人を手助けして、植民地状況の中で育まれた、コンプレックスのかたまりから、彼を解き放つことにある。」p.53

「ニグロに話しかける白人」、子ども扱い、片言で話す、不快にしようという意図はないだろうが、
「だが、まさに、この意志の欠如、この無造作、この無頓着、このくつろぎ、こういった態度で彼を見つめ、彼を身動きできなくさせ、原始人扱い、非文明人扱いすることこそ、不快を与えるのである。」p.55
「そうだ、片言で話すのは、黒人を閉じ込めることになるのだ。」p.59

フランス語を上手に話さないドイツ人やロシア人は自らの文明について証明する必要はないのであるが、黒人の場合は「是が非でも、白人の世界に対して、ニグロ文明の存在を証明する必要があったのだ」p.57

ステレオタイプとの闘い
「そうだ、黒人は、良いニグロであることが求められるのだ」p.58
「気前よく金を浪費するユダヤ人と同じように、モンテスキューを引用する黒人は警戒されるに違いな

い。」
「大学の場を一歩外に出ると、馬鹿者どもがうようよといるのだ。といってこの連中を教育せよなどというのではなく、黒人が、この連中の考える原型の奴隷にならないようにさせることが重要なのである。」p.58

「アフリカの大農場主の、次のような有無を言わせぬ論拠がある、「われわれの的は小学校の教師だ！」p.59

黒人が精神障害・分裂症を発症する道筋
「黒人の最初の反応が、彼を定義しようとするものに対して、ノンということであることが納得されよう。黒人の最初の行動が反応[反作用]であることが納得されそう。そして、黒人は同化の程度いかんによって評価されるがゆえに、帰朝者がフランス語でしか表現しないことがまた納得されよう。つまり彼は、以後生じた断絶を強調しようと努めるのだ。」pp. 59-60
「世界中どの国にも、出世主義者、「もう自分を自分と感じない人間」がいる。」p.60
「帰朝したばかりの黒人が、彼の誕生を目にした集団の言語とは異なる言語を取り入れるという事実は、一つのズレを、裂け目を表している。」p.47

手段としての言語－承認の欲求？
リヨンで講演をした後、本国の友人がファノンに「根は、お前は白人なんだよ」とほめる。「私に[白人の]市民権が与えられたのである。」p.62
「歴史的に見て、黒人がフランス語を話したがっている、ということは理解する必要がある。なぜなら、それは、五十年前にはまだ黒人には禁じられていた門を開くことを許す鍵だからである。」
「それは、自分自身に対し、文化への完全な適合を証明する、それだけの数の手段となるのである。」p.62

2.「黒い皮膚の女と白人の男」
『わたしはマルチニック娘』批判、「有害な行動を説く、安直な作品」p.65
主人公：マヨット・カペシア、白人男性アンドレとの恋愛
皮膚の黒い女性が白人の男性との恋愛を通じて、「魔術的に自分を白くする、それによって成り立つ一種の救済を夢見ることは、マルチニックにおいては、あたりまえになっている。」p.67
主人公は、「身体と思考において、世界を白くしようと努めることになる。まず彼女は洗濯屋となるのだ。」p.69
母、祖母側に白人が存在することの重要性、価値の高さ
「マヨットが目指すのは、乳白化なのである。なぜなら、結局のところ、血統を白くしなければならないのだから。このことをマルチニックの女はすべて知っており、口にし、繰り返し語っている。血統を白くすること、血統を救い出すこと。」p.70

『ニニ』
ニニ：混血娘、マクタール：黒人でニニに求愛する

ニニと混血社会のマクタールの拒絶、去勢の罪とする
「ニグロの娘が白人の世界に受け容れられたいと渇望するのは、自分が劣っていると感じているからだ。」p. 81
「強迫観念に取りつかれた神経症」
「劣等意識の奴隷となったニグロと、優越意識の奴隷となった白人が、どちらも、神経症的な方向指示線に従って行動している」pp.81-82
「黒い皮膚の人間には、自分の個別性を逃れ、自分の現存在を無化しようという企てがみられる。黒い皮膚の人間が抗議をするとき、そのたびに自己疎外が起こる。黒い皮膚の人間が非難の声を発するとき、そのたびに自己疎外が起こる。」p.82

3.「黒い皮膚の男と白人の女」
「白人の女が私を愛するならば、彼女は、私が白人の愛に値するものであることを証明してくれることになる。私は白人のように愛されることになる。」p.85

「ある一つの物語が民間伝承の内部で語り継がれていくとき、それは、この物語がなんらかの形で「土着の魂」の一部分を表現しているからである。」p.86

ルネ・マランの小説
主人公：ジャン・ヴヌーズ：ニグロ、生まれはアンティル、長年来ボルドーに住むヨーロッパ人
白人アンドレ・マリエルとの恋、白人の友人からの許可を必要とする p.90
友人の手紙で、見かけが「格別浅黒い」だけでヨーロッパ人であると認めてもらう。
白人女性と結婚することは、ニグロや混血の男にとって「復讐」なのではという責め。P.92
「主観的緊張を追い払うためになんと多くの努力が必要なことか。」p.93

「歴史的に白人の女と寝るという罪を犯したニグロは去勢されるということを私たちは知っている。白人の女をものにしたニグロは、同族のものからは禁忌とされる。」p.94

神経症の徴候　１．遺棄による不安、２．攻撃性　３．自己自身の価値の否認 p.95

主人公の将来のために、主人公をフランス人にしようとして、寄宿学校へ連れてきた両親との断絶、絶望、孤独
自分が愛されることにも、恐怖心を抱く
「ジャン・ヴヌーズは、内面生活のために闘う十字軍兵士である。」p.101
「ヴヌーズは黒人―白人の関係を生きる体験を代表してはいない、そうではなく、たまたま黒人である一神経症患者の行動の仕方を代表しているにすぎない」p.102-3
「一個人の神経症の構造とは、ちょうど、一方では環境に由来する、他方ではこの個人のこの影響へのまったく個人的な反応の仕方に由来する、葛藤のふしの、自我の内部における生長であり、生成であり、出現であろう。」p.104

「私の皮膚の色は、いかなる場合にも欠陥と感じとられてはならない。ヨーロッパ人によって押しつけられた裂け目を受け容れる瞬間から、ニグロはもう休息を知らない。」
解決方法―「世界の再構造化を内に含んでいる。」p.105

4.「植民地原住民のいわゆる依存コンプレックスについて」

マノニ著『植民地化の心理』批判
植民地化される側には、依存コンプレックスがあらかじめ存在するのであるから、植民地化される前から、植民者を待っていた。よって、植民者は悪くないのであると主張した。
「ヨーロッパ文明とそのもっともすぐれた代表者たちは、植民地の人種差別には責任がない。」と発言。P.113

←ファノンは厳しく批判

ファノンの立場:「すなわち、一つの社会は人種差別的であるかないかである、と」p.108
「私は、主観的な体験も、他人によって理解されうると心から信じている。であるから、黒人問題は、私の、私だけの問題である、と言って身をのり出し、研究し始める気はまったくない。だが、マノニ氏は、白人に対する黒い皮膚の人間の絶望を、内側から感じとろうとはしなかったように思われるのだ。この研究の中で私は、黒人の悲惨に触れるように努めた。感覚的に、また感情的に。私は客観的であろうとは望まなかった。その上、それは間違っている。私には、客観的であることはできなかったのだ。」p.109
世界上の、歴史上の人種差別に相違はない。「人間の同じ堕落」と「破産」が存在する
「あらゆる形態の搾取は互いに似通っている。それらはすべて、聖書風の掟のようなもののうちにおのれの必然性を求めに行く。あらゆる形態の搾取は同一なのだ。なぜなら、それらはすべて、ただ一つの同じ《対象》人間に及ぼされるからだ。甲なり乙なりの搾取の構造を、抽象の次元において考察しようとするとき、主要な、根本的な問題、すなわち人間をそのあるべき位置に置き直すという問題を自分に覆い隠すことになる。」p.111

ナチ、南アの人種隔離、アメリカ合衆国におけるリンチ、植民地における人種主義・・・

「そうだ、ヨーロッパの文明と、そのもっとも優れた代表者たちは、植民地の人種差別の責任者なのだ。」p.112

フランシス・ジャンソンへの共鳴
「一国に所属するあらゆる人間は、この国の名のもとにおいて犯された犯罪行為に責任を分かつ」p.113
「したがって、あなたがたが、一見、手を汚さないことに成功したとしても、それは他の連中が、あなたがたのかわりに手を汚しているからなのだ。あなたがたは、手仕事をする人間[手下]を持っているのだ。

そして、一切のことを考慮したとき、本当に罪があるのはあなたがたなのだ。なぜなら、あなたがたがいなければ、あなたがたの怠慢からきた盲目がなければ、これらの連中は、彼ら自身の体面を汚し、かつこれと同じ程度にあなたがたを断罪する行為を、続行していくことはできないだろうからである。」p.113-114

サルトルの主張への同意
「ユダヤ人を作るのは反ユダヤ主義である」p.115
「マダガスカル人はマダガスカル人として存在しない。マダガスカル人は自己の「マダガスカル人であること」を絶対的な形で実存する。彼がマダガスカル人であるのは、白人がやってくるからである。」p.119

「マダガスカル島に上陸した白人は、精神に絶対的な傷を生じせしめた。マダガスカル島へのヨーロッパの侵入がもたらした影響は、ただ単に心理的なものにとどまらない、なぜなら、誰もが指摘したとおり、意識と社会状況との間には内的な関連があるからだ。
経済的な影響があろうだと？だがなすべきは植民地化の裁判なのだ！」p.119

精神分析医として、「患者が自己の無意識を意識化するように、二度と幻覚の乳白化を試みぬように、そうではなく、まさしく社会構造の変革という方向で行為するように手を貸さなければならない。」p.121-122
「私の目的は、動機がひとたび解明されたなら、彼が葛藤の真の源に向けて――すなわち、社会構造に向けて、行動（あるいは受動）を選ぶことのできるようにすることとなろう。」p.122